

連載『陰陽五行』講座

この本がテーマとするアジア古来の哲学にはさまざまな分野のものがありますが、そのなかでもっとも重要なもののひとつ『陰陽五行』の哲学について、現代の科学的な認識に対応する解釈もくわえながら解説していきます。

文と写真、構成 = 樹心院 華林

発行 = 2013年6月（彩流華第26号）

陰陽の配置

「陰」と「陽」を意味するものを絵画などで配置するときは、陰をむかって左に、陽をむかって右に配置するとされます。

たとえば日月(太陽と月)を一つの絵画に描くときは、月をむかって左に、日をむかって右に配置するのです。庶民的な用途の絵画などでは違うものもみられるようですが、古い由緒正しい文化ではこの法則はほぼ守られています。

日月を絵にするときには、一枚の絵に両方を描くよりも、日月を別々に描いて対とするほうがより強い意味があるとされます。※1 皇室などでもこの日月を描いた軸や旗などを飾るときは、月が描かれたものをむかって左に、日が描かれたものをむかって右に飾る伝統があることは知られています。

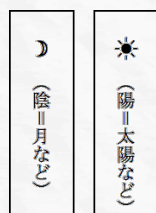
この左右の配置には興味ぶかい伝承があります。中国古代の盤古伝説※2 では、宇宙の始原を意味する神・盤古が死んでその左目から太陽が、右目から月が生まれたとされます。注目されるのは、日本の神話もよく似た内容を伝えることです。つまりイザナギ神が左目を洗ったときに天照大神=太陽神、右目を洗ったときに月読神=月神が生まれました。

盤古やイザナギ神に向き合ったとすると、その右目はむかって左の目、左目はむかって右の目ですから、これらの神話での目に対応する日月の配置が古来の絵の飾り方における左右と同じであることが分かります。また床飾りや寺院の飾りでは、むかって左を「右」、むかって右を「左」とよぶ習慣が根強いのも、同じような理由によるものと考えられます。

陰陽は男女にも適用されます。陰が女、陽が男です。男女対の人形、とくに雛人形などを飾るときにの左右が話題になることが多いようですが、江戸時代までの大名家などの雛人形では、学芸員がいて資料どおり飾っている文化財ではむかって左に女の人形を、むかって右に男の人形を飾っています。大正時代ごろから逆にすることが増えていったという説がありますがそうなのかもしれません。

陰陽が月・日のほかに水・火を代表的なものとする【講座1】で述べましたが、日本の中世では興味ぶかい進展をみせます。

『君台観左右帳記』その他でうかがい知ることができる室町八代将軍足利義政の同朋衆が銀閣寺※3でおこなった床飾りでは、華=器+水+植物を「陰」とし、燭台=火を「陽」とし、左右の配置はむかって左に「陰」、むかって右に「陽」としています。※4 義政の時代に同朋衆が残した文化はのちの時代に理想とされて広がってゆきますから、古代からの陰陽の配置は中世の室町時代に、この時に完成した『床の間』の飾り方に受け継がれていることが分かります。後の時代の「三具足」はこれを起源としているのでしょうか。 .



陰陽の掛軸などの、古来の正しい配置

※1 日月の絵にかぎらず、対にするための2つの掛軸を二幅対と呼びます。多くの場合、陰陽を意味するものとなっています。

※2 中国の盤古伝説の初出は三世紀ごろ？。とすれば日本の神話(古事記・日本書紀)の成立より五百年ほど前。

※3 銀閣寺は正確には慈照寺。ただし義政生前は東山殿・東山山荘などとよばれ江戸時代はこの呼び名が多い。

※4 第25号特集参照。

陰と陽

陰陽五行の哲学では、宇宙と地上のすべてのもの、すべてのことがらを陰と陽の組み合わせで成り立っているとします。

陰と陽は「性質」や「運動法則」、「状態」を示すものと考えます。

陰は閉じる、寒くなる、下がる、暗くなる、などの、いわばマイナス方向に変化する性質、運動法則を示します。また、小さい、冷たい、下、暗い、などの状態を示すものです。

陽は開く、暑くなる、上がる、明るくなる、などのいわばプラス方向に変化する性質、運動法則を示します。また、大きい、熱い、上、明るい、などの状態を示します。

陰陽五行や類似の哲学を少し学んだ人では、右のうち、つつい状態のほうに目が行きがちかもしれません。しかし、ほんらい重視されるのは、状態ではなく性質や運動法則のほうです。寒いのが必ずしも陰なのではなく、寒くなるのが陰なのです。たとえば気温で言えば立春は陽に転ずるときですが、つまり一年でいちばん寒いときです。これから徐々に暖かさが増すときなのです。寒いという状態に注目するのではなく、これから気温が上がるという方向性を問題とするのです。だから「立春」という陽の意味合いの言葉をもちいるのです。「立秋」もいちばん暑いとき、これから徐々に気温が下がるときなのです。

実生活においては、多くの場合、この方向性が問題になるでしょう。身体がづらいのは、寒さよりむしろ寒くなっていくことです。その温度に慣れればそれほど厳しくはないのです。寒さに向かうときの気温の一〇度と、暖かさに向かうときの一〇度では身体に感じるものはまるで違うでしょう。

また、陰や陽が状態やことがらを示すときは、暗に対照的な二つのことを比較してもちいている場合といえるでしょう。

天体では、陰の象徴的な存在は太陰つまり月、陽の象徴的な存在は太陽つまり日です。地上からみてもっとも存在感が強いこの二つの天体では、比較すれば太陽は陽の象徴といえます。太陽は熱く、明るいのです。また地上を熱くしてゆく原動力でもあります。太陰=月は太陽にくらべれば暗くて対照的で、つまり陰の象徴となります。太という最上級の敬語(接頭語)をつかって陰と陽がそのまま太陰、太陽という天体の名前になっているのが分かります。

今度は天体ではなくて地上においては、陰の性質を代表するものは水、陽の性質を代表するものは火です。

明るく熱い火が陽を象徴するのは分かりやすいでしょう。いっぽう、冷たくて下方に流れる水が陰の性質をもつ代表的なものであるのも理解しやすいでしょう。このように、陰陽五行の哲学のひとつの特徴は天体と地上のものを常に同じ土俵のうえで考えてゆくところです。

もう一つの陰陽 = 天地

もうひとつ、特別の意味合いで語られる陰陽の対比があります。それは天地です。

天地では、地が陰、天が陽です。色で表現すると、ふつうの陰陽は黒と赤ですが、天地の場合は陰(地)の色が白、陽(天)の色は変わらずに赤になります。

国旗・日の丸を思いうかべれば分かるように、この陰陽では白が赤よりも大きいとします。つまり、天に対して地のほうがずっと大きな存在なのです。そして四角い白地に赤い丸があるのは、方形(四角)が地を、円形が天を意味するという考え方にもとづきます。

天地を意味するものを吉祥として配置するときは、現実とは逆に地を上、天を下に配置します。易でも天の卦が上、地の卦が下にあるのは「否」(大凶の意)で、逆を「泰」(大吉の意)とします。紅白では白を上、赤を下に配置します。天下の書府と呼ばれた加賀藩大名献上の紅白の餅の飾りは白が上、赤が下になっており、円形の紅白だけでなく方形(四角)の紅白の餅をならべて飾るなど、流石と思わせます。伝統的な生け花でも紅白を生けるときは白が上、赤が下としています。

(紅白以上の色数を意識するときは別の法則に従うこともあります)

その理由は、天地(を意味する色など)を逆に配置することによって天地が元に戻ろうと動き、そして天地(陰陽)が交感するからなのです。このように、陰陽を運動法則やその交わりといった「動き」でとらえるのが古来の陰陽の哲学の真髄です。

泰 (地天泰)
天地が逆に配置される。本来の位置に戻ろうと動き両者が交感(交差)するのでとても良い状態とする。

否 (天地否)
天地が本来の場所に落ち着いて動かないので淀んだとても悪い状態とする。

陰陽をあらわす「卦」と「天地」

易(えい)では上の二つの記号(爻)で陰陽を表現し、爻を三個組み合わせせて八通りの卦(せ)・八卦ができます。左の図の部分のように、陽が三つ重なった卦が「天」、陰が三つ重なった卦が「地」を表現します。

その三つ重なった卦をさらに上下に二つ置き六四卦ができます。
天地を上下に配置した卦は「否」すなわち非常に悪い状態。天地を逆に配置した卦は「泰」つまり非常に良い状態を示します。

陰、陽の(対比の)例

陰	陽
月(太陰)	日(太陽)
水	火
暗	明
寒	暑
小	大
減	増
凹	凸
下	上

月(太陰)と日(太陽)

陰陽五行の哲学は、「天体」と「地上の物質方位などのすべてのことがら」を同じ体系でとらえてゆくという、奇想天外ともいえるものです。しかし同時に正確で綿密な天体の観測にもとづいており、おどろくほど科学的な一面をあわせもっています。

天体において陰を代表するのが月＝太陰です。太陰は月の古い呼び名で、「陰」に最上級の敬語「太」がついたものです。ほかに「太」がつく天体は太陽と太一(北極星)、太白(金星)だけです。これらの星がとくに貴い星と考えられました。

いっぽう、天体において陽を代表するのが日＝太陽です。陽の性質の代表的なものは熱や光などですから、太陽が陽の象徴あるいは原動力であることはうなずけます。※1

陰陽の二つの力のはたらきで万物が動くというのがこの哲学の真髄ですが、なかでも「暦」は重要なものの一つといえます。

太陽の力が一番弱い、つまり日照時間も南中高度も最小の冬至(新暦12月22日ごろ)から、その力が徐々に強まって日照時間も南中高度も最大の夏至(新暦6月22日ごろ)に到り、また弱まって次の冬至に到る、というサイクルが一年という単位です。ただし、日本やアジアでは古い時代からこの一年の区切りを冬至や夏至とはせず、冬至から一カ月以上あとの立春の少し前ごろとしました。※2そして一年を太陽の強さにおうじて春夏秋冬という四季に区切りました。

これは太陽の変化＝消長にともなう暦の決め方ですが、これに月の変化・満ち欠けの要素を加えたものがアジア古来の暦です。一年の最初の新月(朔)から次の新月の前日までを一月、二番目の新月から二月・・・というふうに十二月までを定めました。※3これに太陽が昇っては沈む「日」を数えて一月一日、一月二日・・・というふうになったわけです。

今日では旧暦(太陰太陽暦)と呼ばれるものがこれで、新暦＝現代のふつうの暦では「月」という区切りを便宜的に使ってはいるものの本来の意味は失われてしまいました。しかし旧暦を小さく併記した暦は今日でも多く、新月(朔)・上弦・満月(望)・下弦を絵で記した暦も増えており、旧暦がこんな形で復活しているのは面白いことだと思います。またアジアの多くの国々では新暦と旧暦を並行して用いており、日本は旧暦を排除した例外的な国となっています。

昔から毎月の一と十五日は特別の日とみなされてきました。今でも東京などにおいてもこの両日には神棚や仏前に榊を捧げる習慣が多いようで、花卉市場にはその前に榊がたくさん出るようです。この一と十五日は本来は旧暦によるもので、つまり月の満ち欠けをより所として生活していた旧暦のころの名残で、一日は新月(朔)の日、十五日は満月(望)です。※4

※1 いっぽうの月は夜の象徴ですが少しつきつめて考えるとそれだけでは「陰」の代表格であることは納得がゆきにくいところもあるでしょう。月は北極星や金星との関係が言われ、そんななかで陰の性格がさらにあぶり出されてきます。また、地球に対する「引力」もまた、陰としての重要な側面です。

※2 分かりやすくするためにやや正確さを欠く表現をしている場合があります。正確には雨水の直前の朔日が一月一日とされ、必ずしも立春の前とは限りません。

※3 太陽の消長の一年と月の消長の十二月は一致しません。毎年十一日あまりのズレが生じます。太陰太陽暦では十九年に七回ていど閏月を入れて調整します。

※4 満月は陰暦の十五日と必ずしも一致せず、十六日のことも少なからずあります。後稿で詳述します。